

# 雨ふり

泉鏡太郎

青空文庫



一瀬ひとせを低い瀧ひくたきに颯さつと碎くだいて、爽さわかに落おちて流ながるゝ、桂かつら川の  
 溪流けいりうを、石いし疊たたみで堰せいた水みづの上うへを堰せきの其その半なかばまで、足駄あしだば  
 穿きで渡わたつて出でて、貸浴衣かしゆかたの尻しりからげ。梢こずゑは三階さんがいの高樓かうろうの  
 屋根やねを抽ぬき、枝えだは川かはの半なかばへ差さし蔽おほうた櫺けの下したに、片手かたてに番傘ばんがさ  
 を、トかたンと肩もに持もたせながら、片手釣かたてづりで輕かるく岩魚いはなを釣つつて居ゐる  
 浴客よくきやくの姿すがたが見みえる。

片足かたあしは、水みづの落口おちくちに瀬せを掬からめて、蘆あしのそよぐが如ごとく、片かたあ  
 足しは鷺さぎの眠ねむつたやうに見みえる。……堰せきの上かみの水みづは一際ひとときは青あをく澄す  
 んで靜しづかである。其處そこには山椿やまつばきの花片はなびらが、此このあたり水す中ちゆう  
 の岩いはを飛とび岩いはを飛とび、胸毛むなげの黄色きいろな鵲せき鴿きの雌鳥めんどりが含ふくみこぼし

た口紅くちべにのやうに浮く。

雨あめはしとくと降ふるのである。上流じやうりうの雨あめは、うつくしき雫しづく

を描えがき、下流かりうは繁吹しぶきに成なつて散ちる。しとくと雨あめが降ふつて居ゐる。

このくらゐの雨あめは、竹たけの子笠こがさに及およぶものかと、半纏はんでんばかりの

頬ほ被かぶりで、釣棹つりざをを、刺さいて見みしよ、と腰こしにきめた村男むらをとこが、

山笠やまがさに七八尾しちはつびき、銀色ぎんいろの岩魚いはなを徹とほしたのを、得意顔したりがほにぶら

下げつゝ、若葉わかばの陰かげを岸きしづたひに、上流じやうりうの一本橋いっぽんばしの方ほうから

すたくと跣足はだしで來きた。が、折をりからのたそがれに、瀬せは白しろし、氣き

を籠こめて、くるくくる、カカカと音ねを調しらぶる、瀧たきの下したなる河鹿かしか

の聲こゑに、歩あゆみを留とどめると、其處そこの釣人つりてを、じろりと見遣みやつて、空むなし

い渠かれの腰こしつきと、我わが獲えものを見較みくらべながら、かたまけると云い

ふ笑<sup>ゑみかた</sup>方の、半面<sup>はんめん</sup>大二ヤリにニヤリとして、岩魚<sup>いはな</sup>を一振<sup>ひとふり</sup>、ひ

らめかして、また、すたく。……で、すこし岸<sup>きし</sup>をさがつた處<sup>ところ</sup>で、

中流<sup>ちゅうりゅう</sup>へ掛渡<sup>かけわた</sup>した歩<sup>あゆみ</sup>板<sup>いた</sup>を渡<sup>わた</sup>ると、其處<sup>そこ</sup>に木小屋<sup>きごや</sup>の柱<sup>はしら</sup>ばかり、

圍<sup>かこひ</sup>の疎<sup>あら</sup>い「獨鈷<sup>とっこ</sup>の湯<sup>ゆ</sup>。」がある。——屋根<sup>やね</sup>を葺<sup>ふ</sup>いても、板<sup>いた</sup>を打<sup>う</sup>つ

ても、一雨<sup>ひとあめ</sup>強<sup>つよ</sup>くかゝつて、水嵩<sup>みづかさ</sup>が増<sup>ま</sup>すと、一堪<sup>ひとたま</sup>りもなく押<sup>お</sup>

流<sup>しなが</sup>すさうで、いつも然<sup>さ</sup>うしたあからさまな體<sup>てい</sup>だと云<sup>い</sup>ふ。——

半纏<sup>はんてんぎ</sup>着<sup>き</sup>は、水<sup>みづ</sup>の浅<sup>あさ</sup>い石<sup>いし</sup>を起<sup>おこ</sup>して、山笹<sup>やまざさ</sup>をひつたり挟<sup>はさ</sup>んで、

細流<sup>さいりゅう</sup>に岩魚<sup>いはな</sup>を預<sup>あづ</sup>けた。澆刺<sup>はつらつ</sup>と言<sup>い</sup>ふのは此<sup>これ</sup>であらう。水<sup>みづ</sup>は尾鰭<sup>をひれ</sup>

を泳<sup>およ</sup>がせて岩<sup>いは</sup>に走<sup>はし</sup>る。そのまゝ、すぼりと裸體<sup>はだか</sup>に成<sup>な</sup>つた。半纏<sup>はんてん</sup>

を脱<sup>ぬ</sup>いだあとで、頬<sup>ほ</sup>かぶりを取<sup>と</sup>つて、ぶらりと提<sup>さ</sup>げると、すぐに

湯氣<sup>ゆげ</sup>とともに白<sup>しろ</sup>い肩<sup>かた</sup>、圓<sup>まる</sup>い腰<sup>こし</sup>の間<sup>あひだ</sup>を分<sup>わ</sup>けて、一個<sup>いっこ</sup>、忽<sup>たちま</sup>ち、ぶくり

と浮いた茶色の頭と成つて、そしてばちやくと湯を澆ねた。  
時に、其の一名、弘法の湯の露呈なことは、白膏の群  
像とまでは行かないが、順禮、道者、村の娘、嬰兒を  
抱いた乳も浮く……在の女房も入交りで、下積の西洋  
畫を川で洗濯する風情がある。

この共同湯の向う傍は、淵のやうにまた水が青い。對岸の  
湯宿の石垣に咲いた、枝も撓な山吹が、ほのかに影を淀まし  
て、雨は細く降つて居る。湯氣が霞の凝つたやうにたなびいて、  
人々の裸像は時ならぬ朧月夜の影を描いた。

肝心な事を言忘れた。——木戸錢はおろか、遠方から故  
々汽車賃を出して、お運びに成つて、これを御覽なさらうと

する道徳家、信心者があれば、遮つてお留め申す。——如何  
 となれば、座敷の肱掛窓や、欄干から、かゝる光景の見  
 られるのは、年に唯一兩度ださうである。時候と、時と、光  
 線の、微妙な配合によつて、しかも、品行の方正なるも  
 のにのみあらはるゝ幻影だと、宿の風呂番の（信さん）が言つ  
 た。——案ずるに、此は修善寺の温泉に於ける、河鹿が吐く蜃  
 氣樓であるらしい。かた／＼、そんな事はあるまいけれども、  
 獨鈷の湯の恁る状態をあてにして、お出かけに成つては不可  
 い。……

ゴウーンと雨に籠つて、修禪寺の暮六つの鐘が、かしらを打

つと、それ、ふツと皆消えた。……むくくと湯氣ばかり。堰に

釣つりをする、番傘ばんがさの客きやくも、槻けに暗くくなつて、もう見えぬ。

葉末はずゑの電燈でんとうが雫しづくする。

女中ぢやうちうが廊下らうかを、ばたくと膳ぜんを運はこんで來た。有難ありがたい、ひとて

銚子うし。床とこの櫻さくらもしつとりと盛さかりである。

が、取立とりたてて春雨はるさめのこの夕景色ゆふげしきを話はなさうとするのが趣意しゆいで

はない。今度こんどの修善寺しゆぜんじゆきには、お土産話みやげばなしが一つある。

何事なにごとも、しかし、其その的まとに打撞ぶつかるまでには、弓ゆみと云いへども道だ

中うちうがある。酔よつて言いふのではないけれども、ひよろ／＼矢やの夜よ

汽車ぎしやの状さまから、御一覽ごいちらんを願ねがふとしよう。

先まづもつ以て、修善寺しゆぜんじへ行くのに夜汽車よぎしやは可笑をかしい。其處そこに仔細しさいがあ



る。たま／＼の旅行だし、静岡まで行程を伸して、都合で、  
 あれから久能へつて、龍華寺——一方ならず、私のつたない  
 作を思つてくれた齋藤信策（野の人）さんの墓がある——其  
 處へ參詣して、蘇鐵の中の富士も見よう。それから清水港を  
 通つて、江尻へ出ると、もう大分以前に成るが、神田の叔父と  
 一所の時、わざとハイカラの旅館を逃げて、道中繪のや  
 うな海道筋、町屋の中に、これが昔の本陣だと叔父が言つた  
 だゞつ廣い中土間を奥へ抜けた小座敷で、お平についた長芋の  
 厚切も、大鮪の刺身の新しさも覺えて居る。「いま通つて  
 来た。あの土間の處に腰を掛けてな、草鞋で一飯をしたものよ。  
 爐端で挨拶をした、面長な媼さんを見たか。……其の時分は、

しまだまげ なや  
島田 鬻で惱ませたぜ。」と、手酌で引かけながら叔父が言つ

た——古い旅籠も可懐い。……

それとも、静岡岡から、すぐに江尻へ引返して、三保の松

原へ飛込んで、天人に見参し、きものを欲しがる連の女に、

羽衣、璣珞を拜ませて、小濱や金紗のだらしなさを思知

らさう、ついでに萬葉の印を結んで、山邊の赤人を、桃の花

の霞に顯はし、それ百人一首の三枚めだ……田子の浦に打

出でて見れば白妙の——ぢやあない、……田子の浦ゆ、さ、打

出でて見れば眞白にぞ、だと、ふだん亭主を彌次喜多に扱ふ女

に、學問のある處を見せてやらう。たゞしどつち道資本が掛る。

湯治を幾日、往復の旅錢と、切詰めた懷中だし、あひ

成りませう事ことならば、其その日のうちに修善寺しゅぜんじまで引返ひきかへして、  
 一ひと旅籠はたごかすりしたい。名案めいあんはないかな、と字じの如ごとく案あんずると：  
 …あゝ、今いまにして思おも當ひあたつた。人間にんげん朝起あさおきをしなけりや不可いけな  
 い。東京驛とうきやうえきを一番いちばんで立てば、無理むりにも右様みぎやうの計略けいりやくの  
 行おこなはれない事こともなささうだが、籠城ろうじやう難儀なんぎに及およんだ處ところで、夜討ようち  
 は眞似まねても、朝あさがけの出來できない愚將ぐしやうである。碎くだいて言いへば、夜  
 逃にげは得手えてでも、朝旅あさたびの出來できない野郎やらうである。あけ方がたの三時さんじに起お  
 きて、たきたての御飯ごはんを掻か込んで、四時よじに東京驛とうきやうえきなどとは思おも  
 ひも寄よらない。——名案めいあんはないかな——こゝへ、下町したまちの姉ねえさ  
 んで、つい此この間あひだまで、震災しんさいのために逃にげて居ゐた……元ぐわんら  
 來い、静岡しづおかには親戚しんせきがあつて、地ちの理りに明あきらかな、粹いきな軍師ぐんしが

あら  
顯はれた。

「……九時五十分かの終汽車で、東京を出るんです。……  
静岡へ、丁ど、夜あけに着きますから。其だと、どつちを見ぶ  
つしても、其の日のうちに修善寺へ参られますよ。」

めう  
妙。

奇なる哉、更に一時間いくらと言ふ……三保の天女の羽  
衣ならねど、身にお寶のかゝる其の姉さんが、世話になつた禮  
かた／＼、親類へ用たしもしたいたから、お差支へなくば御  
一所に、——お差支へ？……おつしやるもんだ！ 至極結  
構。で、たゞ匆で連出す算段。あゝ、紳士、客人には、  
あるまじき不料簡を、うまれながらにして喜多八の性をうけた

しがなさに、忝かたじけねえと、安敵やすがたきのやうな笑ゑみを漏もらした。

ところ

處で、その、お差支さしつかへのなさを裏うらがきするため、豫かねて知合しりあひでは

あるし、綴蓋とぢふたの喜多きたの家内かないが、折をりからきれめの鯉かつをぶし節にんべんをイへ

買出かひだしに行くゆくついでに、その姉ねえさんの家うちへ立寄たちよつて、同行どうかうさん三

人ひとの日取ひどりをきめた。

ちよつと

——一寸、ふでを休やすめて、階子段はしごだんへ起たつて、したの長火ながひば

鉢ちを呼よんで曰いはく、

「……それ、何なに——あの、みやげに持もつて行いつた勘茂かんもの半はんぺんは

幾いくつだつけ。」

「だしぬけに何なんです。……五いつつ。」

「五いつつか——私わたしはまた二ふたつかと思おもつた。」

「唯た二つ……」

「だつて彼家は二人きりだからさ。」

「見つともないことをお言ひなさいな。」

「よし、あひ分つた。」

五つださうで。……其を持參で、取極めた。たつたのは、日

曜に當つたと思ふ。念のため、新聞の欄外を横に覗くと、

その終列車は糸崎行としてある。——糸崎行——お恥かし

いが、私に其の方角が分らない。棚の埃を拂ひながら、地名辭

典の索引を繰ると、糸崎と言ふのが越前國と備前國と

に二ヶ所ある。私は東西、いや西北に迷つた。——敢て子

供衆に告げる。學校で地理を勉強なさい。忘れては不可

ません。さて、どつち道、静岡を通るには間違のない汽車だ  
 から、人に教を受けなくて済ましたが、米原で、るのか、岡  
 山へ眞直か、自分たちの乗った汽車の行方を知らない、心  
 細さと言つてはない。しかも眞夜中の道中である。箱根、足  
 柄を越す時は、内證で道組神を拜んだのである。  
 處で雨だ。當日は朝のうちから降出して、出掛ける頃は横し  
 ぶきに、どつと風さへ加はつた。天の時は雨ながら、地の理は案  
 内ない美人を得たぞと、もう山葵漬を箸の尖で、鯛飯を茶  
 漬にした勢で、つい此頃筋向の亭さんに教をうけた、市  
 ケ谷見附の鳩じると言ふ、やすくて深切なタクシイを飛ばし  
 て、硝子窓に吹つける雨模様も、おもしろく、馬に成つたり

駕籠かごに成なつたり、松並木まつなみきに成なつたり、山やまに成なつたり、嘘うそのない  
 ところ、溪河たにがはに流ながれたり、東京驛とうきやうえきに着ついたのは、まだ三  
 十分さんじつぶんばかり發車はつしやに間まのある頃ころであつた。  
 水みづを打うつたとは此この事こと、停車場ステエシヨンは割わりに靜しづで、しつとりと構こう  
 内い一面いちめんに濡ぬれて居ゐる。赤帽君あかぼうくんに荷物にもつを頼たのんで、廣ひろい處ところをず  
 らりと見渡みわたしたが、約束やくそくの同伴どうはんはまだ來きて居ゐない。——大おほまは  
 りには成なるけれど、呉服橋ごふくばしを越こした近ちかい處ところに、バラツクに住す  
 居ゐる人ひとだから、不斷ふだんの落着家おちつきやさんだし、悠然いうぜんとして、やが  
 て來こよう。

「靜岡しづをかまで。」

と切符きつぷを三枚さんまい頼たのむと、つれを搜さがしてきよろついた様子やうすを案あんじ



て、赤帽君は深切であつた。

「三枚？」

「つれが來ます。」

「あゝ、成程。」

突立つて居ては出入りの邪魔にもなりさうだし、とば口は吹降

りの雨が吹込むから、奥へ入つて、一度覗いた待合へ憩んだが、

人を待つのに、停車場で時の針の進むほど、胸のあわたゞしい

ものはない。「こんな時は電話があるとな。」「もう見えませう。

——こゝにいらつしやい。……私が行つて見張つて居ます。」家

内はまた外へ出て行つた。少々寒し、不景氣な薄外套の袖

を貧乏ゆすりにゆすつて居ると、算木を四角に並べたやうに、

クツシヨンに席せきを取とつて居ゐた客きやくが、そちこちばらたちくと立掛かる。

……「やあ」と洋杖ステツキをついて留とまつて、中折帽なかをればうを脱とつた人ひとが

ある。すぐに私わたしと口早くちばやに震災しんさいの見舞みまひを言交いひかはした。花月くわげつの

ひらをかごんばちらう

平岡權八郎わたしひとさんであつた。「どちらへ。」「私は人ひとを一ちよつと寸

送おくりますので。」「終汽車しまひぎしやではありますまいね。それだと靜じつと

しては居ゐられるない。」「神戸行かうべゆきのです。」「私はそのあとので、

靜岡しづをかまで行くゆんですが、糸崎いとぎきと言いふのは何處どこでせう。」「さ

あ……」と言いつた、洋行やうかうがへりの新橋しんばしのちやきくも、同じおな

く糸崎いとぎきを知らなかつた。

此この一ひとたてが、ぞろでと出でて行ゆくと、些ちと大袈裟おほげさのやうだが

待合室まちあひしつには、あとに私わたし一人ひとりと成なつた。それにしても靜じつとしては

居ゐられない。……行ゆき——行ゆきと、呼よぶのが、何どうやら神かう戸べ行ゆきを飛と越びこして、糸いと崎ざき行ゆき——と言いふやうに寂さびしく聞きこえる。急いそいで出でると、  
 ステエシヨン  
 停車場の入口いりぐちに、こゝにも唯ただ一人ひとり、コートの裾すそを風かぜに颯さつと吹ふきまどはされながら、袖そでをしめて、しよぼ濡ぬれたやうに立たつて、雨あめに流ながるゝ燈ひの影かげも見みはぐるまいと立たつて居ゐる。

「來きませんねえ。」

「來こないなあ。」

しかし、十時じふじよん四十八分じふはちふん發はつには、まだ十分じつぶん間かんある、と見み較くらべると、改かい札さつ口ぐちには、知しらん顔かほで、糸いと崎ざき行ゆきの札ふだが掛かつて、改か札さつのお係かかりは、剪はさみで二つばかり制せい服ふくの胸むねを叩たたいて、閑かん也なりと濟すまして居ゐらるゝ。此これを見みると、私わたしは富とみ札ふだが力きまチンと極きまつて、一い

分ちぶで千せんりやう兩とりはぐしたやうに氣き抜けがした。が、ぐつたりと  
 しては居ゐられない。改札口かいさつぐちの閑かんなり也なりは、もう皆乗みなのり込だあとら  
 しい。「確たしかに十分じつぶんおくれましたたわね、然さういへば、十時五十  
 分ぶんとか言いつて居ゐなすつたやうでした。——時間じかんが變かはつたのかも  
 知しれません。」慥かう言いふ時ときは、七三しちさんや、耳みみかくしだと時間じかんに間  
 違ちがひはなからう。——わがまゝのやうだけれど、銀杏いんげん返がへや圓まるま  
 鬚げは不可いけない。「だらしはないぜ、馬鹿ばかにして居ゐる。」が、憤いきどほつ  
 たのでは決けつしてない。一寸ちよつとの旅たびでも婦人をんなである。髪かみも結ゆつたら  
 うし衣服きものも着換きかへたらうし、何なにかと支度したくをしたらうし、手荷てにもつ  
 を積つんで、車くるまでこゝへ駈かけつけて、のりおくれて、雨あめの中なかを歸かへ  
 のを思おもふとあはれである。「五分ごぶんあれば間まにあひませう。」其處そこ

で、別の赤帽君の手透で居るのを一人頼んで、その分の切符を託けた。こゝへ駈けつけるのに人数は恐らくなからう、「あなた氣をつけてね、脊のすなりとした容子のいゝ、人柄な方が見えたら大急ぎで渡して下さい。」畜生、驕らせてやれ——女をんなの口で赤帽君に、慫う言つた。

「お氣の毒様です。——おつれはもう間に合ひません。……切符はチツキを入れませんから、代價の割戻しが出来ます。」

もう動き出した汽車の窓に、するくると縋りながら、

「お歸途に、二十四——と呼んで下さい。その時お渡し申しますから。」

いとぎきゆき  
糸崎行の此の列車は、不思議に絲のやうに細長い。いま  
はるか遙な石壇へ、面長な、白い顔、棲の細いのが駈上らう  
かと且つ危み、且つ苛ち、且つ焦れて、窓から半身を乗り出し  
て居た私たちに、慇懃に然う言つてくれた。

——後日、東京驛へ歸つた時、居合はせた赤帽君に、そ  
の二十四——のを聞くと、丁ど非番で休みだと云ふ。用をきいて、  
ところを尋ねるから、麴町を知らして歸ると、すぐその翌  
日、二十四——の赤帽君が、わぎく山の手の番町まで、  
「御免下さいまし。」と丁寧に門をおとづれて、切符代を返  
してくれた。——此の人ばかりには限らない。静岡でも、三島  
でも、赤帽君のそれぞれは、皆もの優しく深切であつた。――

—お禮<sup>れい</sup>を申<sup>まを</sup>す。

浅葱<sup>あさぎ</sup>の暗<sup>くら</sup>い、クツシヨンも又細<sup>またほそ</sup>長<sup>なが</sup>い。室<sup>しつ</sup>は悠々<sup>いうく</sup>とすいて居<sup>ゐ</sup>た。が、何<sup>なん</sup>となく落着<sup>おちつ</sup>かない。「呼<sup>よ</sup>んだら聞<sup>きこ</sup>えさうですね。」  
 「呉服橋<sup>ごふくばし</sup>の上<sup>うへ</sup>あたりで、此<sup>こ</sup>のゴーと言<sup>い</sup>ふ奴<sup>やつ</sup>を聞<sup>き</sup>いてるかも知<sup>し</sup>れない。」  
 「驛前<sup>えきまへ</sup>のタクシイなら、品川<sup>しながは</sup>で間<sup>ま</sup>に合<sup>あ</sup>ふかも知<sup>し</sup>れない。」  
 「そんな事<sup>こと</sup>はたゞ話<sup>はなし</sup>だよ。」唯<sup>と</sup>、バスケットの上<sup>うへ</sup>に、  
 小取<sup>ことり</sup>まはしに買<sup>か</sup>つたらしい小形<sup>こがた</sup>の汽車<sup>きしや</sup>案内<sup>あんない</sup>が一冊<sup>いつさつ</sup>ある。此<sup>これ</sup>が  
 私<sup>わたし</sup>たちの近所<sup>きんじよ</sup>にはまだなかつた。震災<sup>しんさい</sup>後は發行<sup>はつかう</sup>が後<sup>おく</sup>れるの  
 ださうである。

いや、張合<sup>はりあひ</sup>もなく開<sup>ひら</sup>くうち、「あゝ、品川<sup>しながは</sup>ね。」カタリと

窓まどを開あけて、家内かないが抜出ぬけだしさうに窓まどを覗のぞいた。「駄目だめだよ。」その癖くわ私わたしも覗のぞいた。……二人三人ふたりさんにん、乗組のりくんだのも何處どこへか消きえたやうに、もう寂寞ひっそりする。幕まくを切きつて扉とびらを下おろした。風かぜは留やんだ。汽車きしやは糠雨ぬかあめの中なかを陰々いんくとして行く。早くはや、さみしい事ことは、室内しには、一人ひとりも残のこらず長々ながくと成なつて、毛布まうふに包つまつて、皆寝みなねて居ゐる。

ひがしまくら 東枕ひがしまくらも、西枕にししまくらも、枕まくらしたまゝ何處どこをさして行くのであらう。汽車案内きしやあんないの細字さいじを、しかめ面づらで恁かう透すかすと、分わかつた——遙々はる／＼と京大阪きやうおほさか、神戸かうべを通とほる……越前ゑちぜんではない、備前國びぜんのくに糸崎いとざきである。と、發着はつちやくの驛えきを静岡しづおかへ戻もどして繰くると、「や、此奴こいつは弱よわつた。」思おもはず聲こゑを出だして呺つぶやいた。静岡着しづおかちやくは午前ごぜんま



さに四時よじなのであつた。いや、串じようだん戲ぎではない。午前ごぜんなどと文ぶ  
 化くわがつたり、朝あさがつたりしては居ゐられない。此この頃ごろではまだ夜よ  
 半なかではないか。南洋なんやうから土人どじんが來きても、夜中よなかに見物けんぶつが出來でき  
 ものか。「此奴こいつは弱よわつた。」——件くだんの同伴つれでないつれの案内あんないで  
 は、あけ方がたと言いつたのだが、此方こちらに遠とき慮もんばかりがなかつた。その人ひとの  
 ゆききしたのは震災しんさいのぢきあとだから、成程なるほど、その頃ころだと夜よ  
 があける。——此この時間前後じかんぜんごの汽車きしやは、六ろく月ぐわつ、七しち月ぐわつだと  
 國府津こふづでもう明あかるくなる。八はち月ぐわつの聲こゑを聞きくと富士驛ふじえきで、まだ些ちつ  
 と待まちたないと、東ひがしの空そらがしらまない。私わたしは前年ぜんねん、身延みのぶへ參まゐつた  
 ので知しつて居ゐる。

「あの、此この汽車きしやが、京きやう、大阪おほさかも通とほるのだとすると、夜よのあけるのは何處どこらでせうね。」

「時間じかんで見みると、すつかり明あかるくなるのは、遠とほ江たふみのくに國はままつ濱松だ

。

と退屈たいくつだし、一ひとつ遠江國とほたふみのくにと念ねんを入いれた。

横よこに俾くるまが一いち挺にちやうたゝぬ——彼處あそこですか。」

「うむ。」とばかりで、一いつ向かうおもしろくも何なんともない。

「其處そこまで行ゆきませうよ。——夜中よなかに知らぬ土地とちぢやあ心こころ細ほそ

いんですもの。」

「飴あめぢやあるまいし。」

と、愚ぐにもつかぬことをうつかり饒舌しゃべつた。静岡しづおかまで行ゆくも

のが、濱松へ線路の伸びよう道理がない。

……しかし無理もない。こんな事を言つたのは恰も箱根の山中で、丁ど丑三と言ふ時刻であつた。あとで聞くと、此の夜汽車が、箱根の隧道を潜つて鐵橋を渡る刻限には、内に留守をした女中が、女主人のためにお題目を稱へると言ふ約束だつたのださうである。

「何の眞似だい。」

「地震で危いんですもの。」

「地震は去年だぜ、ばかな。」

然りとは雖も、その志、むしろにあらす捲くべからず、石にあらず、轉すべからず。……ありがたい。いや、禁句だ。こんな處

で石が轉んで堪るものか。たとへにも山が崩るゝとか言ふ。其の  
 山が崩れたので、當時大地震の觸頭と云つた場所の、剩へ  
 この四五日、琅玕の如き蘆ノ湖の水面が風もなきに浪を立て  
 ると、うはさした機であつたから。

山北、山北。——鮎の鮓は——賣切れ。……お茶も。——

もうない。それも侘しかつた。

が、家を出る時から、こゝでこそと思つた。——實は其の以前

に、小山内さんが一寸歸京で、同行だつた御容色よしの

同夫人、とめ子さんがお心入の、大阪遠來の銘酒、

白鷹の然も黒松を、四合罎に取分けて、バスケットとも言

はず外套にあたゝめたのを取り出して、所帯持は苦しくつて

もこゝらが重寶ちようほうの、おかゝのでんぶの蓋ふたものを開あけて、さあ、  
 飲やるぞ！ トンネルの暗闇やみに彗星はうきぼしでも出でて見みると、クツシヨ  
 ンに胡坐あぐらで、湯呑ゆのみにつぐと、ポンとにほふ、と、かなで書かけばお  
 なじだが、其そのぷんが、腥なまぐさいやうな、すえたやうな、どろりと腐くさ  
 った、青あをい、黄きいろ色い、何なんとも言いへない惡臭わるくささよ。——飛とんでもな  
 いこと、……酒さけではない。

一いつ體たい、散さん々／＼の不首尾ふしゆびたら／＼、前世ぜんせの業ごふでもあるや  
 うで、申まをすも憚はゞかつて控ひかへたが、もう默だまつては居あられない。たしか  
 横濱よこはまあたりであつたらうと思おもふ。……寂さびしいにつけ、陰氣いんきにつ  
 け、隨ず所る停車場しよステエシヨの燈ともは、夜汽車よぎしやの窓まどの、月つきでも花はなでもあるも  
 のを——心こころあての川崎かはさき、神奈川かながはあたりさへ、一寸ちよつとの間まだけ、

汽車きしゃも留とまつたやうに思おもふまでで、それらしい燈影ひかげは映うつらぬ。汽車きしゃ  
 はたゞ、曠野あらのの暗夜やみを時々とき／＼けつまづくやうに慌あわしく過すぎた。  
 あとで、あゝ、あれが横濱よこはまだつたのかと思おもふ處ところも、雨あめに濡ぬれし  
 よびれた棒杭ぼうぐひの如ごとく夜目よめに映うつつた。確たしかに驛えきの名なを認みめたのは最も  
 う國府津こふづだつたのである。いつもは大船おほふなで座ざを直なほして、かなた  
 に逗子づしの巖山いはやまに、湘南しやうなんの海うみの渚なぎさにおはします、岩殿いはとくわんの觀かん  
 世音ぜおんに禮れいし參まゐらす習ならひであるのに。……それも本意ほんいなきの二つで  
 あつた。が、あらためて祈念きねんした。やうなわけで、其その何どの邊へんで  
 あつたらう。見上みあげるやうな入道にふだうが、のろりと室しつへ入はいつて來きた。  
 づんぐり肥ふとつたが、年とし紀しは六十とそばかり。ト頭あたまから頬ほへ縦横たてよこに縋ほ  
 帶うたいを掛かけて居ゐる。片頬かたほが然さらでも大面おほづらの面つらを、別べつに一面顔ひとつかほ

を横よこに附着くつつけたやうに、だぶりと膨ふくれて、咽喉のどの下したまで垂たれ下さがつて、はち切れさうで、ぶよ／＼して、わづかに目めと、鼻はな。繃帶はうたいを覗のぞいた唇くちびるが、上うへ下したにべろんと開あいて、どろりとして居ゐる。動うごくと、たら／＼と早はや膿うみの垂たれさうなのが――丁ちやうど明あいて居ゐた――私わたしたちの隣となり席せきへどろ／＼と崩くづれ掛かつた。オペラバツグを提さげて、飛模とびも様の派手はでな小袖こそでに、紫むらさきの羽織はおりを着きた、十八九わかの若い女をんなが、引ひき續つづいて、黙だまつて其その傍わきへ腰こしを掛かける。

と言いふうちに、その面つら二ふたつある病びやう人にんの、その臭氣におひと言いつたらない。

お察さつしあれ、知ち己きの方かた々々。――私わたしは下駄げたを引ひずつて横飛よことびに逃出にげだした。

「あゝ、彼方あつちがあんなに空すいて居ゐる。」

と小戻こもとりして、及およ腰びに、引ひこ抜ぬくやうにバスケットを掴つかんで、慌あわてて上すべつて、片足かたあしで、怪飛けしとんだ下駄げたを捜さがして逃にげた。氣きの毒どくさうな顔かほをしたが、女をんなもそツと立たつて來くる。

此この樣子やうすを、間近まぢかに視みながら、毒どくのある目めも見向みむけず、呪詛のろひらしき咳しはもしないで、ずべりと窓まどに仰向あふむいて、病やまひの顔かほの、泥濘ぬかるみから上あげた石白いしうすほどの重おもいのを、ぢつと支さへて居ゐる病びやうにん人きは奇特どくである。

いや特とく勝しょうである。且かつ以もつて、たふとくさへあつた。

面當つらあてがましく氣きの毒どくらしい、我勝手われがの凡夫ぼんぷの淺ましきにも、人知ひとしれず、面おもてを合あはせて、私わたしたちは恥入はぢいつた。が、藥王品やくわうぼんを誦ず



しつゝも、鯖さばくつた法師ほふしの口くちは臭くさいもの。其その臭くささと云いつては、  
 しょうかうぐち 昇降しょうかう口くちの其方そつちの端はしから、洗面所せんめんじよを盾たてにした、いま此方こなたの端はし  
 まで、むツと鼻はなを衝ついて臭にほつて来る。番町ばんちやうが、又大袈裟またおほげさな、  
 と第一だいいち近所きんじよで笑わらふだらうが、いや、眞個まつたくだと思おもつて下ください。  
 のちに、やがて、二時にじを過すぎ、三時さんじになり、彼方あちこち此方ひとりで一人起おき、  
 ふたり 二人さめると、起おきたのが、覺さめたのが、いづれもきよとんとし  
 て四邊あたりを見みながら、皆申合みなまをしあはせたやうに、ハンケチで口くちを押おさへ  
 て、げツツと咽むせる。然さもありなん。大入道おほにふだうの眞向まむかうに寢ねて居あ  
 るとこ た男は、たわいなく寢ねながら、うゝと時とき々／＼苦くるしさうに魘うなされ  
 た。スチームがまだ通とほつて居ある。しめ切きつた戸との外そとは蒸むすやうな  
 糠雨ぬかあめだ。臭くさくないはずはない。

女房にようばうでは、まるで年としが違ちがふ。娘むすめか、それとも因果いんぐわな何とか言いふ妾めかけであらうか——何なににしろ、私わたしは、其その耳みみかくしであつたのを感謝かんしやする。……島田しまだ鬘まだでは遣切やりきれない。

もう箱根はこねから駈落かけおちだ。

二人分ににんぶん、二枚にまいの戸とを、一いつ齊しよにスツと開ひらくと、岩いは膚はだの雨あめは玉清水たましみづの滴したる如ごとく、溪河たにがはの響ひびきに煙けむりを洗あらつて、酒さけの薰かをりぶんと立たつた。手てづから之これをおくられた小山内夫人をさないふじんの袖そでの香かも添そふ。

二三杯にさんばいやつつけた。

阿部川あべかはと言いへば、きなこ餅もちとばかり心得こころえ、「贊成さんせい。」とさきばしつて、大船おほふなのサンドヰツチ、國府津こふづの鯛飯たひめし、山北やまきたの鮎あゆの鮓すしと、そればつかりを當あてにして、皆買みなかつて食たべるつもりなの、

あしがら 足柄に縁のありさうな山のかみは、おかゝのでんぶを詰らなさ  
 うに覗きながら、バスケットに凭れて弱つて居る。

「なまじ所帯持だなぞと思ふから慾が出ます。かの彌次郎の詠  
 める……可いかい——飯もまだ食はず、ぬまずを打過ぎてひもじ  
 き原の宿につきけりと、もう——追つつけ沼津だ。何事も彌次  
 喜多と思へば濟むぜ。」

と、とのさまは今の二合で、大分御機嫌。ストンと、いや、床  
 が柔軟いから、ストンでない、スポンと寝て、肱枕で、阪  
 地到來の芳酒の酔だけに、地唄とやらを口誦む。

お前の袖と、わしが袖、合せて、

——何とか、何の袖……たゞし節なし、忘れた處はうろ抜き

で、章句もんくを口くちのうちで、唯引張るただひっぱる。……

露地ろぢの細道ほそみち、駒下駄こまげたで――

南無三寶なむさんぼう、魔まが魅さした。ぶくくうみぼうずのしくと海坊主うみぼうず。が――

あゝ、之これを元ぐわんらい來けねん懸念けんねんした。道其みちその衝しょうにあたつたり。W・Cへ

通とほりがかりに、上うへから蔽おつかぶさるやうに來た時は、角つののあるだけ、

青鬼あをおにの方ほうがましだと思つた。おも

アツといつて、むつくと起き、外ぐわいたう套あたを頭たまから、硝子戸がらすどへひ

つたりと顔かほをつけた。――之これだと、暗夜あんやの野のも山やまも、朦朧もうろうとし

て孤家ひとりやの灯ともしびも透すいて見みえる。……一つお覺おぼえ遊あそばしても、年ねんな

内いの御重寶ごちようほう。

外ぐわいたう套なの裡なかから小ちひさな聲こゑで、

「……返<sup>かへ</sup>つたかい。」

「もう、前<sup>さつ</sup>刻<sup>き</sup>。」

私<sup>わたし</sup>は耳<sup>みみ</sup>まで壓<sup>おさ</sup>へて居<sup>ゐ</sup>た。

どぢやうぬまづ

鰯<sup>いさな</sup>の沼<sup>す</sup>津<sup>づ</sup>をやがて過<sup>す</sup>ぎて、富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>驛<sup>えき</sup>で、人<sup>じん</sup>員<sup>ゐん</sup>は、はじめて動<sup>うご</sup>い

た。

それもたゞ五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>人<sup>にん</sup>。病<sup>びやう</sup>人<sup>うにん</sup>が起<sup>た</sup>つた。あ<sup>むら</sup>と<sup>さき</sup>へ紫<sup>むらさき</sup>がついて下<sup>お</sup>

りたのである。……鰯<sup>いさな</sup>の沼<sup>す</sup>津<sup>づ</sup>と言<sup>い</sup>つた。雨<sup>あめ</sup>ふりだし、ま<sup>まつ</sup>だ<sup>くら</sup>眞<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>

だから遠<sup>ゑん</sup>慮<sup>りよ</sup>をしたが、こゝで紫<sup>むら</sup>の富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>驛<sup>えき</sup>と言<sup>い</sup>ひたい、——その

わ<sup>わか</sup>を<sup>を</sup>ん<sup>んな</sup>な<sup>お</sup>若<sup>わか</sup>い女<sup>をんな</sup>が下<sup>くだ</sup>りた。

さては身<sup>み</sup>延<sup>のぶ</sup>へ參<sup>さん</sup>詣<sup>けい</sup>をするのであつたか。遙<sup>えう</sup>拜<sup>はい</sup>しつゝ、私<sup>わたし</sup>た

ちは、今<sup>いま</sup>さらながら其<sup>そ</sup>の二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>を、涙<sup>なみだ</sup>ぐましく見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>つた。紫<sup>むら</sup>は一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>

宙<sup>ちう</sup>で消<sup>き</sup>えつゝ、橋<sup>はし</sup>を越<sup>こ</sup>えた改<sup>かい</sup>札<sup>さつ</sup>口<sup>ぐち</sup>へ、ならんで入<sup>に</sup>道<sup>ふだう</sup>の手<sup>て</sup>を曳<sup>ひ</sup>  
 くやうにして、微<sup>か</sup>な電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>に映<sup>うつ</sup>つた姿<sup>すがた</sup>は、耳<sup>みみ</sup>かくしも、其<sup>そ</sup>のまゝ、  
 さげ髪<sup>がみ</sup>の、黒<sup>くろ</sup>髪<sup>かみ</sup>長<sup>なが</sup>く藤<sup>らふ</sup>たけてさへ見<sup>み</sup>えた。  
 下<sup>げ</sup>山<sup>さん</sup>の時<sup>とき</sup>の面<sup>おも</sup>影<sup>かげ</sup>は、富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>川<sup>がは</sup>の清<sup>きよ</sup>き瀬<sup>せ</sup>に、白<sup>びやく</sup>蓮<sup>れん</sup>華<sup>げ</sup>の花<sup>はな</sup>びらに  
 も似<sup>に</sup>られよとて、切<sup>せつ</sup>に本<sup>ほん</sup>腹<sup>ぶく</sup>を祈<sup>いの</sup>つたのである。  
 興<sup>おきつ</sup>津<sup>なみ</sup>の浪<sup>しらべ</sup>の調<sup>びう</sup>が響<sup>ひび</sup>いた。

大正十三年七月

# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「苦楽 第二巻第一号」プラトン社

1924（大正13）年7月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「燈《ともしび》」と「灯《ともしび》」の混在は、底本の通りです。

※「繙帶」に対するルビの「ほうたい」と「はうたい」、「二人」に対するルビの「ふたり」と「ににん」の混在は、底本の通りです。

※表題は底本では、「雨《あめ》ふり」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった



のは、ボランティアの皆さんです。

# 雨ふり

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>